

西大寺薬師金堂の調査

— 第422次

1 はじめに

調査地は奈良市西大寺小坊町7-26、浄土院境内にあたり、浄土院本堂の建て替えにともなう事前調査として実施した。調査地は隣接地より約0.7~1.0mほど高くなっており、かねてより西大寺薬師金堂の基壇である可能性が指摘されてきた。しかし、これまでおこなわれてきた発掘調査は、調査範囲が限定されていたため、詳細な情報を得ることができなかった（2004年：平成第380次調査、2005年：奈良市04-13次調査など）。

ところが、昨年おこなわれた庫裏の建て替えにともなう第409次調査では、薬師金堂の基壇を検出するとともに、巨大な凝灰岩を埋設する柱穴を発見し、薬師金堂に関する重要なデータを得ることができた。

今回の調査は、まず昨年検出された柱穴を基準として南北3m、東西15mの調査区を設定し、そこから順に北

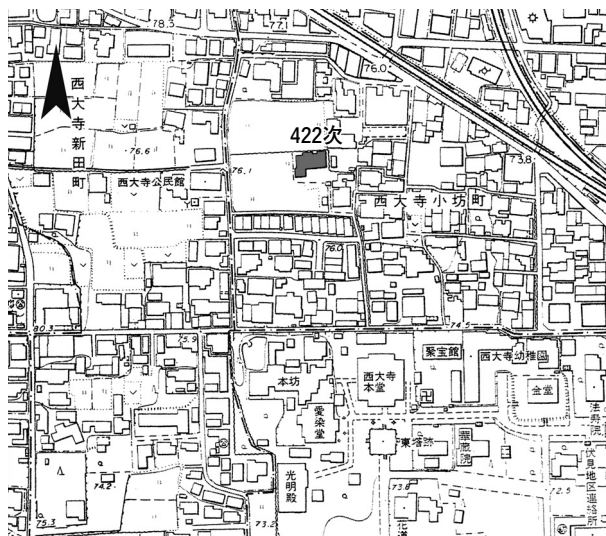


図181 第422次調査区位置図 1：5000

側へ東西3m、南北5mほど拡張した。そしてさらに、南側に東西3m、南北11mほど拡張した。また、調査区の北西寄りに東西1.5m、南北1mほどの小拡張区も設定している。その結果、調査区全体の面積は最終的に94.5㎡となった。調査期間は4月16日から6月15日である。なお、調査期間中2度にわたって浄土院の檀家の方々に説明会をおこなった。

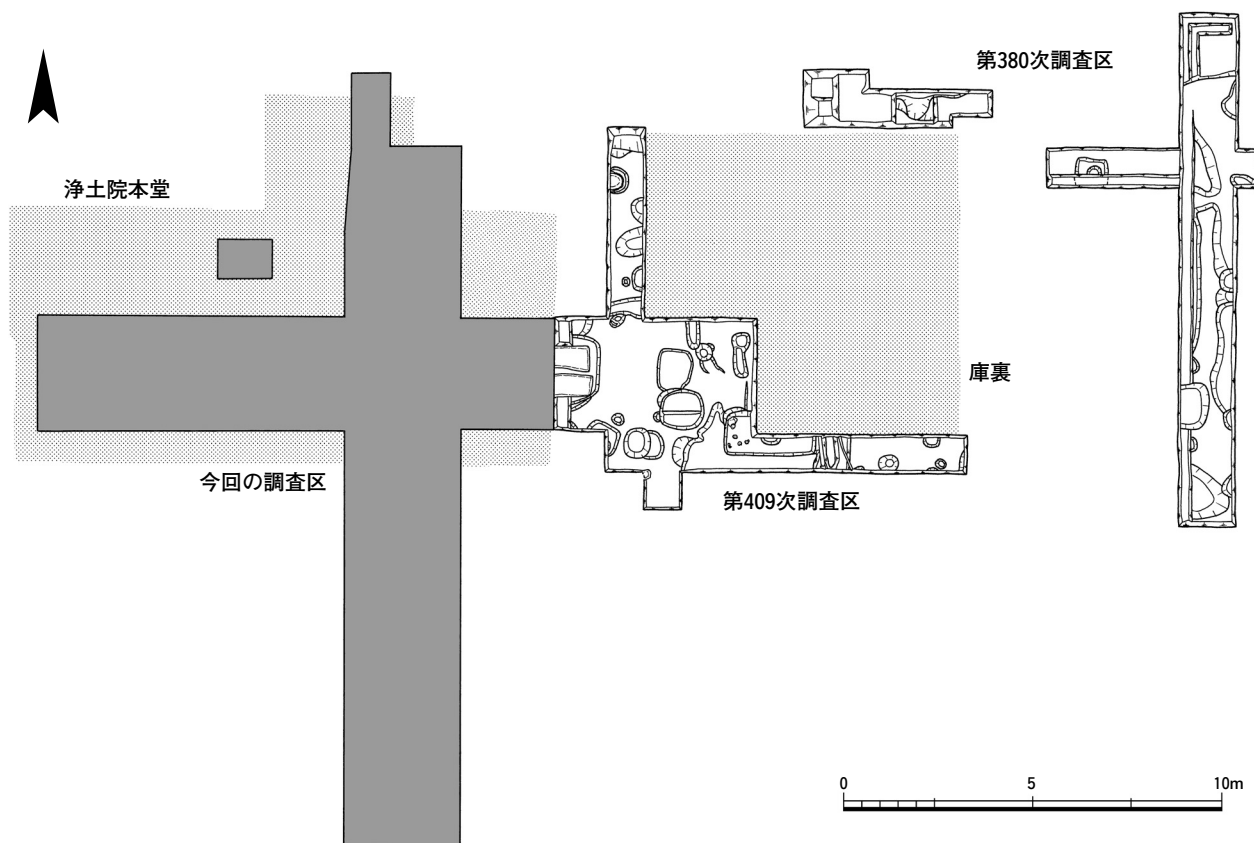


図182 過去の調査区との位置関係 1：200

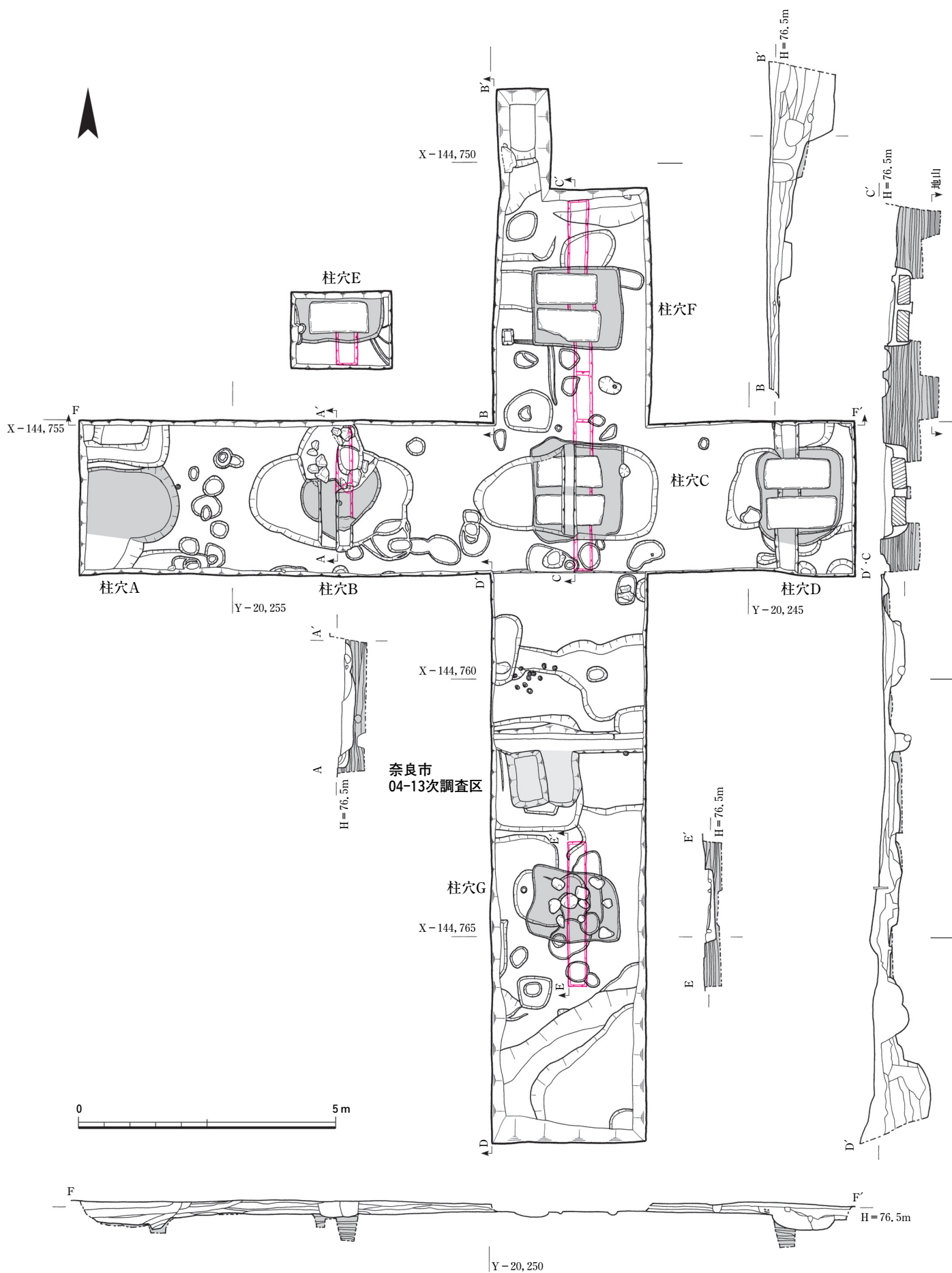


図183 第422次調査遺構平面図・断面図 1:100

2 検出遺構

今回の調査は浄土院本堂の建て替えにともなうものであったため、本堂を除却すると既に基壇土が顔を覗かせている部分もあった。それ以外の箇所では、表土下には標高76.5m程度で近世の整地面が確認される。その整地面を除去すると、標高76.3～76.4mで版築による基壇土が確認できた。これについては後述する。なお、地山層は基壇土の下、標高75.5mで確認した。以下では主に基壇土上で確認できた遺構について記述する。

奈良時代の遺構

SB1000 西大寺薬師金堂である。今回の調査では6基の柱穴を確認することができた。また、調査区の全面にわたって基壇土が検出されている。

基壇は黄褐色土を中心とした土層を交互に積んだ版築によって築かれている。断ち割りの状況から、版築は上層では厚さ3cm程度の比較的細かい単位で黄褐色系の土層が積み重ねられているが、下層では灰色系の粘質土が厚さ5cmとやや厚く重ねられている。なお、残存する基壇の高さは約1m程度である。

基壇の範囲に関しては、調査区の北側において残存基

壇縁を確認することができた。凝灰岩片が基壇縁に張り付く状態で出土しており、その他の基壇外縁に用いられていた部材の破片と考えられる。基壇化粧等は既に失われており、若干の削平を受けているものと考えられる。調査区の南側では大幅な削平が確認できる。出土遺物などから、近世頃の削平と想定される。そのため、金堂の南庇にあたる部分はすべて削平されているものと考えられ、後世の改変が大規模であったことが窺える。

掘込地業については、基壇中央部の断ち割りの状況から設けられていないことがわかる。したがって、直接地山上に基壇を構築したものと考えられるが、地山が窪んでる部分に版築とは異なる堆積土が確認されるため、低い部分には盛土をするなどして基壇形成前の地形を水平に保っていた可能性が高い。

薬師金堂の柱穴は全部で6基確認できた。このうち、調査区の中央では東西方向に4基の柱穴が並んでいる状況を確認することができた(図183、柱穴A～D)。柱穴は一辺約180cmの方形で、おそらくは金堂身舎の柱穴列に相当すると考えられる。柱穴の間隔は概ね15尺で、後述の復元案から金堂中央部に相当することがわかる。この4基のうち、柱穴Dを除くと、いずれも大規模な土坑と重



図184 第422次調査区全景(拡張前 西から)



図185 SB1000 (西から)

複している。これらは礎石の抜取痕であろう。そして柱穴C・Dには、大型の凝灰岩が2基、東西軸で南北に並べて据え付けられていた（凝灰岩の詳細については後述）。これらの凝灰岩は柱穴の底に据え付けられおり、それらを一度埋めてから、その上部に礎石が据え付けられていたようである。したがって、この凝灰岩は上からの加重に対する地業的な役割を果たしていたと推定される。凝灰岩の間に若干の空隙が設けられている点も、加重の分散を意図したものと考えられよう。

一方、柱穴A・Bでは凝灰岩が検出されなかった。柱穴Aに関しては、抜取痕の規模が大きいので、凝灰岩ごと抜き取られている可能性がある（調査中、植栽の植え替えの最中に攪乱坑から同様の凝灰岩片が出土していることも傍証となろう）。しかし、柱穴Bでは柱穴および抜取痕自体が浅いため、当初から凝灰岩は据え付けられず、礎石のみが据え付けられていた可能性が高い。

この身舎の柱穴列より北側に、さらに2基の柱穴を確認することができた（柱穴E・F）。これらは東西軸を揃えて15尺の間隔で並んでいる。これらが身舎の柱穴列の軸から12尺の距離に位置していることから、金堂の北庇に相当するといえよう。柱穴は一辺約160cmの方形で、身舎

のものと比して一回り小さい。これらの柱穴からはいずれも凝灰岩が検出された。状況は身舎のものとはほぼ同じである。

調査区の南側でも柱穴を1基確認した（柱穴G）。形状や規模は柱穴C・Dに類似しているが、やや南北が短い長方形を呈している。柱穴A～Dの軸より30尺弱離れた位置にあることから、身舎の南側柱にともなうものと判断できる。礎石の根石と考えられる比較的大型の礎が確認できるものの、柱穴自体は浅く、凝灰岩も据えられていなかった。これも柱穴Bと同様、凝灰岩を用いずに礎石のみが据えられていたと考えられよう。

なお、この柱穴より南側は基壇そのものが著しく削平されており、南側の庇は確認することができなかった。

また、基壇上には時期不明の小穴が多数存在する。そのいくつかは足場穴である可能性もあるが、推定の域を出ない。

凝灰岩について 今回、柱穴から検出された凝灰岩はいずれも二上山産の流紋岩質溶結凝灰岩である。その大きさには2種類あり、身舎の柱穴から検出された4基は長さ160cm前後、幅60cm、厚さ30cmであり、庇の柱穴から検出された2基は長さ150cm前後、幅60cm、厚さ25cmと、場



図186 SB1000底部分（北から）

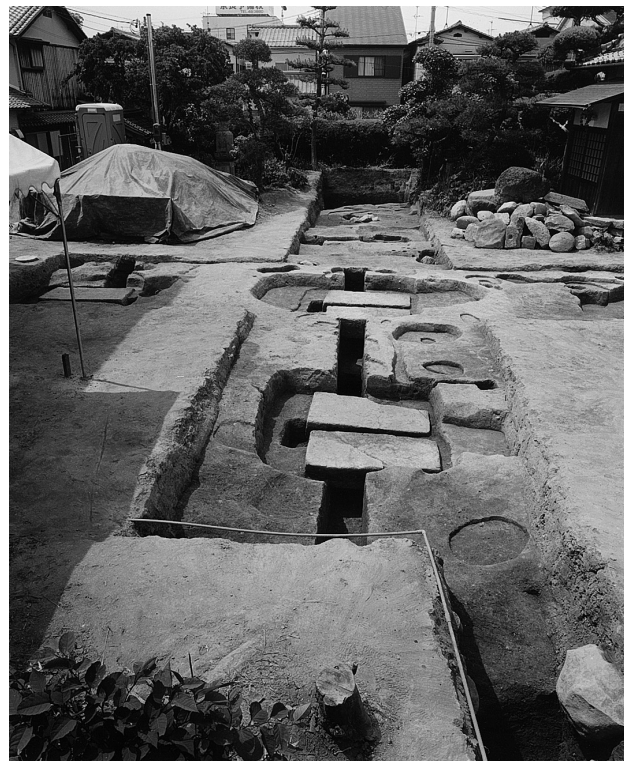


図187 第422次調査区全景（拡張後 北から）

所に応じて大きさに多少の差違が認められる。

凝灰岩の表面にはノミなどによる加工痕が見られるが、凝灰岩ごとに加工痕に著しい差違がある。図188に柱穴D・南側の凝灰岩の表面の状態を掲げた。ここでは極めて先端の細いノミ状の工具によって加工がなされていることがわかる。一方、図189は柱穴C・北側の凝灰岩の表面状態だが、ここでは幅3～5cm程度の幅広いノミ状工具で加工がなされている。また、表面に加工痕が見られないものもあるが、これは凝灰岩の表裏に関係していると考えられる。つまり、加工痕が認められるのは片面のみで、もう片面は加工痕をも磨り消すような表面調整がなされていると考えられる。

ここで問題になるのがこれらの凝灰岩の来歴であるが、凝灰岩ごとに工具の種類が異なる点や、面に応じて加工度合が異なる点、さらには凝灰岩全体に若干の風化が見られる点から、何らかの転用材の可能性が高い。おそらくは建築部材の転用か、あるいは古墳の石櫛石材の転用と考えられるが、すべての柱穴列に凝灰岩が認められるわけではない点や、建築部材（羽目石など）にしてはやや規模が大きすぎる点から、古墳石材の転用を想定しておきたい。



図188 凝灰岩に残る加工痕（柱穴D 西から）

3 出土遺物

土器・陶磁器類 今回の調査ではコンテナ4箱分が出土した。その多くが近世以降の遺物であるが、柱穴B・Cの抜取痕からは奈良時代後半の須恵器が出土している。それ以降の時期の土器が共伴しないことから、薬師金堂焼失（846年？）直後に礎石が抜き取られたのであろう。

瓦磚類 表24からも明らかなように、出土量は極めて少ない。奈良時代の瓦磚類は確認されず、ほぼすべてが近世以降に属するものである。江戸時代の整地面などが確認されていることから、その時期に建造されたとされる浄土院にともなうものと考えられる。

表24 第422次調査区出土瓦磚類集計表

軒 丸 瓦		軒 平 瓦	
型式	点数	型式	点数
巴（江戸前半）	6	江戸前半	1
軒 丸 瓦 計	6	軒 平 瓦 計	1
丸瓦		平瓦	
重量	25.56kg	117.94kg	3.04kg
点数	142	764	3
道 具 瓦 計 14点			
刻印付平瓦（江戸後半）2点		完形平瓦7点	
道具瓦1点		面戸瓦1点	
土管2点		雁振瓦（江戸）1点	



図189 凝灰岩に残る加工痕（柱穴C 西から）

4 まとめ ―薬師金堂復元案―

昨年度の紀要で薬師金堂の復元私案について触れたが、それは極めて限定されたデータをもとに組み立てた不完全な私案であった（『紀要2007』）。しかし、今回の調査において多数の柱穴列を確認できたことから、改めて復元案を呈示することが可能となった。それが図190である。以下、解説を加えてみたい。

まず、『西大寺流記資財帳』によると、薬師金堂の規模は「長十一丈九尺」「廣五丈三尺」とある。これが復元の基礎となるわけであるが、今回検出した身舎部分の柱穴列（東西方向）の間隔は、いずれも15尺であった。そして、柱穴B-C間に西大寺伽藍の中軸線が位置してくることから（『紀要2007』）、この3間は身舎中央部に相当することがわかる。そして、庇の出が12尺であることも判明しており（柱穴B・C-E・F間）、それらを計算に入れると、身舎中央の柱間間隔がやや広がる桁行9間の建物になることが想定できる。すなわち、薬師金堂は中央の基礎構造を左右から支持するような構造と考えられる。

次に梁行であるが、庇の出が12尺である点と、身舎の南北幅を示す柱穴C-G間の間隔がおおよそ30尺弱にな

ることから、梁行4間の建物となることがわかる。『資財帳』の「五丈三尺」という記載から逆算すると、身舎の幅が29尺となることも、今回の成果と矛盾しない。

以上、薬師金堂の復元案について述べてきたが、この復元案は、奇しくも大岡実氏が早くに呈示していた復元案と完全に一致するものであった（大岡実『南都七大寺の研究』1968）。氏の卓見を示すとともに、その説が発掘調査によって実証されたといえよう。

最後に、基壇の規模について触れておきたい。前回の復元私案では、基壇縁と庇の間隔を10尺と想定していたが、今回確認された基壇縁は庇より12尺の位置で確認された。しかも、凝灰岩の破片などが原位置で検出されたことから、ほぼ旧状を反映していると考えられる。したがって、この12尺という数値を採用し、基壇の規模は東西143尺、南北77尺であったと推定される。

なお、『紀要2007』でも若干触れたが、薬師金堂の中軸線と西大寺伽藍の中軸線が一致する点や、薬師金堂の東西中軸が一条条間路心より400尺の位置にあたる点は、薬師金堂の造営に関して、極めて計画的な配置がおこなわれていたことを示している。

（林 正憲）

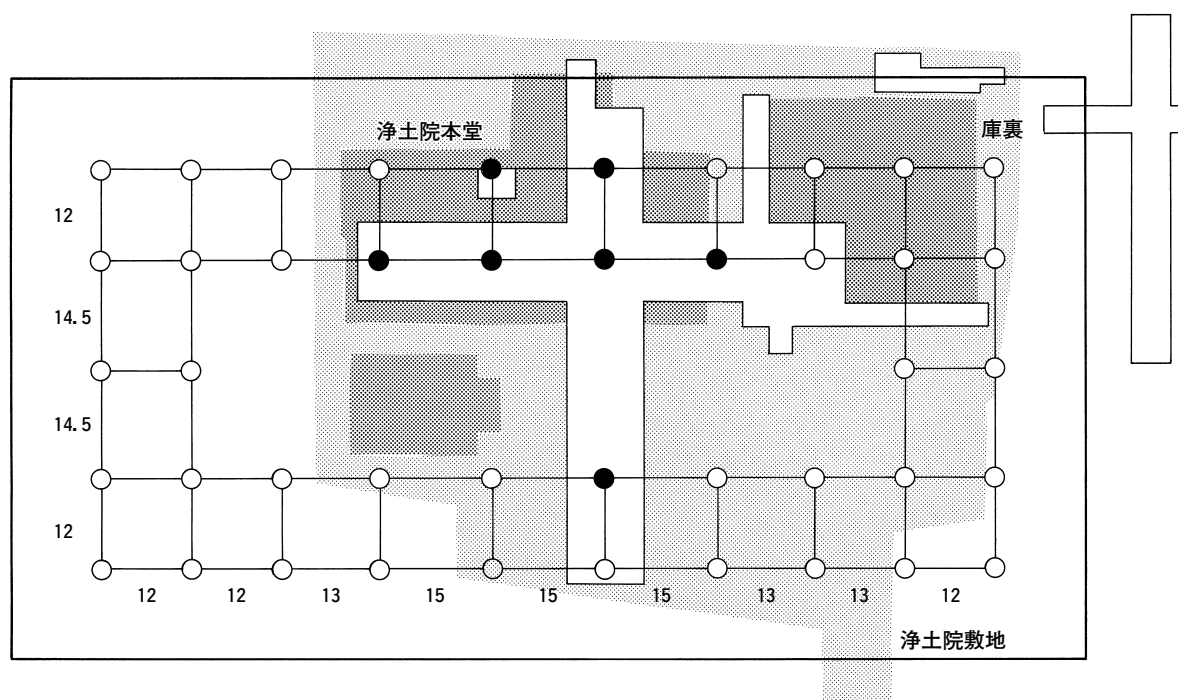


図190 薬師金堂復元模式図 1:300